

今回は「まわり地蔵」について書きたいと思います

失われた風習

今回は「まわり地蔵」について書きたいと思います。

当美術館の隣にある下田山真福寺は、通称下田地蔵尊といい、子育延命地蔵菩薩が二体あります。木仏で、蓮の花の台座に座り、左腕に赤子を抱いておられます。本尊地蔵尊の開扉は酉年ごとに行われます。

他の一体は厨子に納められ、背負われて村々をまわりました。これを「まわり地蔵」といいます。地域は、北は山梨、西は小田原、東は東京一円に及んだそうです。

村では決まった時期にお地蔵さまをお迎えます。各家をまわり、家の者はお札をいただきます。村をひとまわりした後、宿に奉安します。お地蔵さまの前には団子や菓子が山のように供えられ、村人はお祈りをします。下田のお地蔵さまは「子を授かる」「安産」「子どもの成長・延命」にご利益があるといわれ、おいでになるのを心待ちにされたそうです。

その後いくつかの村をまわったお地蔵さまは、毎月23日に真福寺に戻り、法要が行われます。24日に縁日があり、25日に厨子に納められ、また地方をまわるそうです。

下田町(村)では毎年7月24日にお地蔵さまが村中をまわる「まわり念仏」の

真福寺の説明 (真福寺 HP より抜粋)

- 宗派 曹洞宗 (禅宗)
- 御本尊 如意輪観世音菩薩
- 開基 玖巖寿悦 (きゅうがんじゅえつ)
大和尚 寛永十二年 (1635) 寂
- 開山 欄室関牛 (らんしつかんぎゅう)
大和尚 (狛江・泉龍寺二世) 明暦三年 (1657) 寂
- 現住職 第二十一世 松田 良一
- 本堂 明治八年 (1875) 改築
- 昭和三十八年 (1963) 屋根改修
- 平成二十三～二十四年 銅板屋根ほか耐震改修
- 平成二十四年 耐震改修中
- かつては榮松山、のちに駒橋山とよばれたが、現在は下田山真福寺という。
- 1610～1620年ごろ、当時狛江の泉龍寺の檀家であった田邊氏の尽力により当地にお堂がつくられたのが始まりとみられる。
- 真福寺の御本尊は如意輪観世音菩薩で、伝・慈覚大師 (798～864) の御作といわれる。
- 准秩父三十四ヶ札所観音霊場の第一番札所として、午歳 (うまどし) に観世音菩薩の御開帳が行なわれている。(次の御開帳は2014年)
- 子育延命地蔵菩薩の御開帳は酉歳 (とりどし) で、真福寺は都筑・橘樹 地蔵菩薩霊場の十一番札所である。(次の御開帳は2017年)

行事がありました。「まわり念仏」を経験した田邊則夫さん（80才）によると、午前中は村の西部地域、午後は東部地域をまわったそうです。家々は念入りに掃除をし、花、香、供物等を供えてお地蔵さまをお待ちします。お迎えすると家族全員がここを込めてお祈りします。その後子どもも含む集まった人たちで庭先に輪を作り、大数珠を回しながら念仏を唱え、平和と幸福を祈ります。村中まわり終わると大人達だけで真福寺に集まり、感謝を込めた最後の念仏を唱え、この行事は締めくくられるそうです。お供えのお団子やお菓子は子ども達に配られる為、則夫さんも子どもの頃、とても楽しみだったとの事でした。

当館初代館長の故・田邊泰孝は、厨子に納められたお地蔵さまを「地蔵おぶい」して東部地域をまわる役を 20 年間したそうです。

この「まわり地蔵」は江戸時代から始まり昭和 42 年を最後に現在は行われていません。

まわる信者もへり、急速な時代の変化の中、近所付き合いも希薄になってしまった現代ではこのような行事を続ける事は難しいかもしれません。また、お団子やお菓子は包装されず、むき出しの状態だった為、衛生面の心配をする声もあったそうです。

7 月の縁日は盛大で、地元の人はもちろん各地からも多くの信者が訪れたそうです。参道にはおもちゃ屋、そば屋、まんじゅう屋、駄菓子屋などの店がずらりと並びました。品物は村中から借りた雨戸を利用して並べられていたそうです。その為その日はどの家も雨戸なしで夜を明かしたそうですが「お地蔵さまのご利益で泥棒などよりつけない」と信じられていたそうです。何とものんびりとした、また下田のお地蔵さまが敬われていたかがわかるお話ですね。



はまれぼ.COM より横浜市港北区新羽町

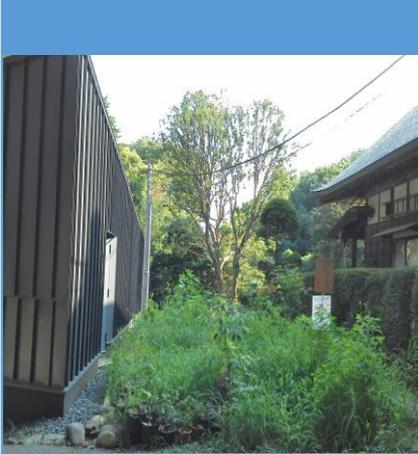


下田山真福寺表門

(参考文献：「港北百話」「陰徳積めば陽報あり」)

文責 日吉の森庭園美術館解説員 田邊雅代

野生植物自生報告



野生植物自生地（蝶の楽園）。

正面に見えるのが雪で損傷した
金木屋。



かつての物置。右奥に金木屋が見える。

田辺光彰美術館の西側、ここには物置が建っていましたが、美術館建築に伴い取り壊しました。

そこで、種を蒔かずにもど様な植物が発芽し育つかを観察・調査しました。

それと同時に蝶の飛来も楽しみました。

来年はどう変わるか楽しみにしてください。もし生物多様性に興味・関心のある方は一緒に観察と生物を増やす活動にご参加ください。

活動姿勢の合言葉は

「急がず、むだ、むり、むらなく五感を使って楽しむ」事です。喜び上手になりましょう。

〈一昨年育った野生植物〉

ハハコグサ 母子草

オオブタクサ 大豚草

イヌビコ 犬菟

ケアリタソウ 毛有田草

ヨウシュヤマゴボウ 洋種山牛蒡

イタドリ 虎林

チチコグサ 父子草

チチコグサモドキ 父子草擬き

タチイヌノフグリ 立犬の陰囊

オオイヌノフグリ 大犬の陰囊

キツネノマゴ 狐の孫

ハエドクソウ 蠅毒草

オオバコ 大葉子

ハキダメギク 掃溜菊

コオニタビラコ 子鬼田平子

ノゲシ 野罌粟 カナムグラ 鉄葎 トキワハゼ 常盤はぜ ムラサキサギゴケ

紫鷲苔 オオセンナリ 大千成 ホトケノザ 仏の座 トウバナ 塔花 キランソ

ウ 金瘡小草 タツナミソウ 立浪草 キュウリグサ 胡瓜草 マルバルコウ 丸葉

縷紅 コナスビ 小茄子 メマツヨイグサ 雌松宵草 コミカンソウ 小蜜柑草

ヌスビトハギ 盗人萩 ゲンノウショウコ 現の証拋 カタバミ 傍食

スベリヒユ 滑り菟 シロザ オオイヌタデ 大犬蓼 イヌタデ 犬蓼

トクダミ ツユクサ 露草

カヤツリグサ 蚊帳吊草 エノコログサ 狗尾草 メヒシバ 雌目芝 コメヒシバ

小雌目芝イヌビユ 犬稗 コニシキソウ 小錦草 イヌホオズキ ゴウシュアリタ

ソウ ザクロソウ 柘榴草 ヌカキビ 糠黍 カラスノゴマ 烏の胡麻 クワ

アサマフウロ ヒメジョオン シソ

2015年には確認出来なかった野生植物



はえどく草 おおぼこ むらさきささげ
ほとけのざ (左図) すべりひゆ かやつりぐ
さ えのころ草 いぬびゆ おおせんなり
まるばるこう

ほとけのざ (こちらは食べられない方)

2016年に新たに観察された野生植物

はこべ みどりはこべ(繁縷) たねつげばな(種漬
花) やぶからし(藪枯らし) おらんだみななぐさ
びろうどもうずいか(びろうど毛蓋花) 2年草 おに
たびらこ(鬼田平子)
むらさきけまん(紫華鬘) あおじそ ちりめんじそ
かきどうし(垣通し) くわくさ(桑草)
たちつぼすみれ(立坪堇) なずな(薺)
ひなたいのこずち(日向猪子韮)
むらさきかたばみ(紫傍食) はなたで(花蓼)
きつねあざみ(狐薊)



むらさきけまん

今回の結果のように同じ場所に必ず同じ植物が観察・生育し続けるとは限りません。難しい言葉ですが次の要因でそうなると言われています。

休眠性 感温性と感光性 病虫害・連作に対する抵抗性 個体群の調節

当美術館には実生の植物があふれています。野生植物は栽培植物とは違い、自分たちを自由に変化させることが許されていますが、同時に誰も守ってはくれません。自分たちで道を決めていくのです。

日吉の庭園森美術館には田辺光彰の収集したフィリピン イフガオの世界遺産である棚田の、民具・神具・農具がありますが、それらを見るにつけ稲作の豊凶が村や民族の生存に直結するため個々の取捨選択が大変重要だと推察しています。我々日本人とは“生存”という観点において大きく違うところに豊かな示唆に満ちています。

昨年見られた植物が今年は見ることができない、しかし同時に新しい種類が現れる。野生植物は栽培植物にはない力強さや危うさそして広がりを感じることができます。生存をかけた人間と同様に自分たちの種族の繁栄を迫及していく愛おしい生命たちです。

2016年からはその調査範囲を拡大し美術館全体の植物を調査したいと思っています。ご来館の皆さまに喜んでいただけるようこれからも環境の維持に努めてまいります。



霜柱（花のように見える）



本さかきの花

文責 日吉の森庭園美術館 館長 田邊美紗代

平成28年2月発行

日吉の森庭園美術館

223-0064

横浜市港北区下田町3-10-34

電話番号・FAX:045-561-321445-561-3214 電子メール: hiyoshinomori@hb.tp1.jp

